

鎌倉への行軍、冬の兵舎を何回も駆け足で走らされ遅れると「もう一回」と走らされたこと。整列ビンタでも上曹ビンタは順番に下級ビンタに移り、何回もビンタをはられたこと等々、当時の辛さは今では懐かしくなっています。現在の若い者にもあの団体生活は一度体験させたらよいと思います。

## 親の反対を押し切り海軍志願

山形県 江目 育 藏

昭和三年三月二十四日、山形県河北町溝延の農家の長男として生まれましたが、昭和十九年ともなれば男は皆兵隊としていくという時代でありました。弟三人、妹一人の家族だったので、私は海軍に志願をしたいと思いつつ両親を説得したのですが、母は反対していました。昭和十九年五月二十日、十九年前期の水兵として舞鶴海兵団へ志願兵として入団しました。兵籍番号は「舞志水三〇四五一番」です。大東亜戦争の末期であ

るなど知る由もなかった私ですが、父は男として止むを得ないと思っていたかも知れませんが、母は私が入隊して一週間ぐらいの間、食事が喉に通らなかつたと言っていたそうであります。今思えば「親の心子知らず」であったのですが、当時としては日本男児としては止むを得ない心境でありました。

海兵団の教育は厳しいものでありましたが、どの海軍出身者も言う通り、今の人には想像もつかぬ三カ月でありました。教育終了後は教班長の指示で「鬼の館山」と言われた千葉県館山砲術学校へ入校しました。対空砲班第十期生として高角砲の教育を受けたのですが、銃砲と名の付くものは全部撃ちました。

海兵団では一般教育、その後は私のように学校へ入る者と実施部隊に行く者とに分かれるのであります。一個班三十人で十二個班を一個分隊とするので、陸軍の分隊とは違い、人数は一個中隊ぐらいです。これが七個分隊で教育を受けるのですから、海兵団の初年兵は約二千五百人ぐらいだったと思います。

私は幸いというか、教班長係を命ぜられていたので

バットによる制裁は受けずに済みました。毎日叩かれるので尻には紫色のアザが絶えず、お互いに見せあって教育の厳しさを語り合っていました。その間、人間の基本である修身、艦船、陸戦、カッター、一般教育、各種の教育を受けたのでした。

館山砲術学校では、陸戦と高角砲ですが、陸戦は陸軍の歩兵と同じで軽機関銃（九二式）の射手として教育を受けました。教官や古兵から一番先に言われたのは「鬼の館山知らぬか」でありました。

学校での教育は、文字通りの「鬼の館山」でした。学校では一人一人の競争ではなく、班毎の競争です。海軍は個人ではなく、団体の協同精神を常日頃教育をします。当時の教官は大正二年生まれの特務士官（当時少尉）青木中尉でしたが現在も元気でおられます。学科では、幾何、ピタゴラスの定理、的速、的進、方向（敵機の）、さらに砲の高角の号令かかり、「進むB 29を狙え」の号令を聞けば、各々「よし」と返事あれば「撃ち方始め」となります。その間三十秒ぐらいで総て準備・修正し、射撃開始となります。

グラマンなど艦上戦闘機のように突っ込んでくるのは「修正ゼロ」で、高角砲の我々は敵機と差し違えの戦闘です。スピットファイア、オートシコルスキー等の敵機が、高速で襲撃してくるから翼が折れるぐらいのスピードです。高角砲弾は弾倉に入れると薬莖を含めて三〇キロぐらいになります。それを装填して、続けて射撃するのですから、照準、射撃、装填などを空襲下に行うのです。その上、正確、機敏、連携と、その訓練は熾烈を極めるものでありました。

三カ月間で練習生の教育を終了し、一重校のマークをもらい卒業しました。その後、幹部教育があり、下士官十人と我等同年兵二十人が合同し実地の勉強をしました。チェンブロックと三又を組み練習です。砲架、砲身を組む勉強を一カ月間、その後、合同隊として舞鶴に帰りました。

舞鶴で部隊編成をやり、館山砲術学校出身たる我々を中心とし三砲台を編成しました。一高角砲に十人、射手、旋回、一番、二番砲手計十人。これを四門と高射測距儀で一砲台の編成をしたのであります。

昭和十九年十二月二十五日、フィリピンのクラーク飛行場へ出動の命令がありました。十二月二十七日、佐世保出帆、バシー海峡が危険ということで台湾の高雄まで十隻の船団を組みました。空母一、海防艦一、我々は海軍のみで八〇〇〇トンの「辰和丸」に乗船しました。

昭和二十年一月一日、海上で正月を迎えました。前の船には陸軍が乗っていましたが、基隆に着く時雷撃を喰らいました。我々は高雄に上陸できましたが、船団は空襲を受け、港内で大部が沈没しました。しかし、我が船は幸運にも無傷でした。

### 【参考資料】

昭和十九年

十月十二日、米機動部隊台湾全土を空襲

十月十五日より台湾沖航空戦

十二月二十三日より比島沖海戦開始、二十六日終結

十二月十九日、比島レイテ作戦中止

二十四日、比島の第四航空軍ルソン島決戦意図

昭和二十年

一月一日、小磯首相「天王山の戦いはレイテから全比島に拡大」と放送

一月九日、米軍比島ルソン島リングエン湾沿岸上陸

二十六日、米軍クラーク飛行場占領

二月三日、米軍マニラ市内侵入

このように、台湾もフィリピンも米軍の空襲下であり、命令のフィリピン、クラーク飛行場へなど行ける状態ではなくなってしまいました。もっとも、我々兵隊に戦況など判っていないのですが。高雄に上陸しましたら命令の変更があり、基隆へ列車で一月十日に着きました。その時、雨の基隆を実感しました。

一週間か十日程滞在し、三〇〇〇トンの「和洋丸」で香港へと出帆、無事上陸をすることができました。

高雄への砲台設置は、中国本土の香港へと変更したわけで、我々は砲四門で一砲台を築くことになり、北角（ノースポイント）に一砲台分全部据え付け、兵舎は元英軍の兵舎（民家を改造したもの）に入りました。

第二砲台は香港の向こう側の島に設置したのです。我が砲台の隊長は陸軍予備学生の陽田少尉で、館山砲術学校の出身でした。

四月二十日前後になると、毎日五機編隊で空襲があり、十一時三十分頃定期的に来襲していました。B29の超爆撃機の高度は八〇〇〇メートルぐらいであるので、七・五ミリの高角砲ではただ弾幕を張るだけで、敵機に届く苦はありません。敵は爆弾を我が陣地には落とすが、香港市内の大事な所、胡文虎の別荘などには落とさないのです。照準が正確であったようです。

この定期便は十日間ぐらい続いたのですが、我が高角砲が一番撃ったのは一回に二、三発でした。そのうちに弾薬の補給が無く在庫だけになってしまったので、各砲は何発と射撃弾数を規制されてしまいました。

その頃は、今にして思えば、米軍はフィリピンに上陸し、さらに戦いは沖繩戦となっていたわけです。四月一日沖繩上陸ですから、主戦場は沖繩となりました。我が砲台の被害は負傷三人でした。食料は持ってきていたので在庫はあり、米は現地米を購入していました。

終戦までは、一般住民との交流は無く、情報を住民から取る機会はありませんでした。

八月十五日、住民街で爆竹が鳴り、星条旗が揚がったので不思議に思いましたが、玉音放送も聞かず、停戦かとは思っても通信機が無く状況不明であったのです。しかし、ようやく香港根拠地隊からの電話で敗戦を知りました。

俘虜になったら、戦犯容疑者逮捕のため住民の首実験があり、我々は住民との接触が少なかったとはいえず、不安な毎日でもありました。大熊少将は戦犯となり最後には処刑されました。兵器はイギリス海軍に渡ししましたが、大砲は置いたまま、その他の計器等を渡すつもりでいたのですが英軍が来ませんでした。

九月五日頃「二十四時間以内に、九龍に集結せよ」という英軍からの命令があり、「大砲の撃針（打針）を抜け、砲身を山へ向ける」というのです。これを英軍の飛行機が空から確認し、英国の軍艦が入って来ました。この日はたしか九月一日だったと思います。

「降伏」は内地のミズーリ号上で行われた九月二日の

前でしたので、正式降伏前の英軍の命令に従うべきでない、もめていました。

九月五、六日頃九龍へ行きましたが、中国人とのトラブルがありました。石を叩き付けられたり、罵声を浴びせられました。その後、九龍へ豪州兵が来て、我々はそのままの服装で、豪州兵が銃を持って我々の脇について街を駆け足で通るのですが、今度はその間、煉瓦などをぶつけられ、「ヤープンシーサン（日本先生）米が少ないから、マンデー（慢々的）死ぬ」と悪口を言われました。負けた帝国海軍軍人の悲哀をつくづく感じました。

九龍の俘虜収容所は、コンクリートの土間にアンペラ一枚を敷いただけ、その上に毛布一枚を敷布団とし、食料は英兵の携帯口糧を一日に二分の一、一日分一六〇〇カロリーでした。

豪、加兵の程度は悪かったです。戦勝国と敗戦国、昨日までは敵同士だから仕方ないのかも知れませんが、私達はマラリアの三日熱にかかりましたが、支給の携帯口糧の中に「キニーネ」が入っていて助かりまし

たし、栄養失調とならずに済みました。バリケードの監視兵が豪州兵からインド兵となったので、携帯口糧と支那そばや饅頭と交換したり、軍服と食糧を交換し空腹を何とかしのいでおりました。しかし、米の支給はありませんでしたので、一年ぐらいは米を食べないで過ごしたわけであります。

昭和二十一年八月四日、LSTの一〇〇Vに乗り浦賀に着き復員したのですが、戦犯者を除いては我々が香港から復員の最終便でありました。病人や妻帯者は比較的早く復員できましたが、私は一般兵のうちでは年齢も若かったので、八月八日頃、地方人（一般の内地的人）と一緒に列車に乗って故郷へ帰りました。山形までの汽車は満員で窓からホームへ降りました。

これでやっと懐かしの故郷へ着いたなあと実感しました。寒河江駅前から電話をしましたら、弟が自転車で迎えにきました。

私は「敗残兵だから家へ帰れるか」と聞いての帰郷でした。両親も元気でいてくれました。砲術学校の青木少尉に「弟は陸軍へ上げる」と言われたということ

です。

帰ってから昭和四十年頃まで、護岸の石屋をしていましたが、私は石積みをしなから、昭和四十五年頃に独立をし現在に至っております。約三十年間土木関係の仕事をしているわけでありませう。

親の反対を押し切って海軍を志願したのですが、幸いに、フィリピン戦にも行かず、高射砲隊でありましたが空襲で弾も受けず、生きて還ることができました。一番喜んでいたのは母親であったかもしれませんが。

## 自分の海軍歴

### 駆逐艦「涼月」

長崎県 牧 尊

私の海軍の兵籍番号は「徴佐世保、機三三七四」でありますから、大正十一年四月四日生まれ、志願でなく昭和十七年徴集兵でありました。以前海軍という志願が多かったのですが、大東亜戦争が始まる頃にな

ると徴兵や召集の兵隊が段々と多くなったといえます。

私の父は朝鮮の元山で建築関係の大きい仕事をやっていたのですが、父は病気で死んでしまい、家には母、兄、姉がおり、私は末子でありました。昭和十二年、十五歳で朝鮮鉄道元山機関区に入社しました。鉄道は鉄道なりの教育がありました。

初めは庫内手、続いて機関助手見習となり、運転の見習となり、さらに機関助手本務と進みます。本務は機関車の釜炊きが本番で、これができるようになって助手としては一人前となるのです。その頃、外人の子供が機関区に遊びに来ていたので機関車に乗せて、上司から叱られたこともありました。

列車は京城―牡丹江までの朝鮮と満州を結ぶ広軌道の国際線でありました。我々乗務員は朝鮮、満州間で交替するのであります。

昭和十八年一月四日、佐世保海兵団へ入団ということになりましたから、昭和十二年入社から十七年暮れまで朝鮮鉄道で一人前の運転、機関士として勤務したことになります。私のことは、長姉が一番心配をして